

花見川のみどころ

壮絶な治水の歴史を秘める川

花見川は印旛沼とつながる川であり、正式名称は『印旛放水路』です。江戸幕府による利根川の東遷事業によって印旛沼は氾濫が増え、流域住民を苦しめてきました。彼らを救うため、放水路を作って海まで水を流す「印旛沼堀割普請」が江戸時代から計画され、数度にわたって行われました。

しかし、湿地が多く扱いにくい土壌や、天災に見舞われた不運もあって失敗を繰り返し、堀割普請は多くの犠牲者を出す壮絶な大工事となったのです。



横戸の切通し

完成したのは数百年後の昭和の時代。その後に桜の植樹や多くの制水門が整備され、現在の花見川の風景ができあがりました。



天戸制水門・水道橋・花見川大橋

四季折々の自然風景

流れに沿って十数キロのサイクリングコースが続き、桜並木やいくつもの公園が川沿いを彩ります。花見川は季節ごとの自然の美しさに出会える川。

上流域の花島公園では、春は桜や黄色いハナナ、夏は豊かに茂る木々が緑陰を作り、秋の川辺にはコスモスが咲き乱れます。



花見川千本桜緑地と桜並木

下流域や河口ではユリカモメやヒドリガモなど渡り鳥のほか、アオサギやカルガモといった留鳥たちにも出会えます。魚や虫も豊富な水辺は、鳥たちが集まる絶好のバードウォッチングエリアなのです。



長作見晴台

楽しみ方いろいろ、アクティビティ

川沿いのサイクリングコースで自転車やランニング。もっと水辺に近づきたいなら、花島公園付近を基地にカヤックを漕ぎ出してツーリングはいかが。花見川はさまざまなアクティビティが楽しめる、千葉市有数のアウトドアゾーンです。

(撮影: @ryo_cycledna)
千葉市の川の風景フォトコンテスト応募作品

花島公園からカヤックで出発

その一方で、のんびり釣り糸を垂れたり、岸辺をゆったり歩んでみたり、最河口では海に沈む夕日をいつまでも眺めている…そんな静かな楽しみ方にもこたえてくれるのが花見川。人それぞれが思い思いに過ごせる、温かな水辺空間です。



美浜大橋と夕日

花見川に暮らす生き物



ユリカモメ

白色が鮮やかな冬鳥。夏にはユーラシア大陸北部などで繁殖する。



アオサギ

青みがかった灰色の羽根をもち、川岸などでエサを狙う。



ウグイス

渋い緑色をしている。普段はササややぶの中などで暮らす。



コゲラ

日本最小のキツツキ。こげ茶に白模様が特徴的。公園でも見られる。



アオジ

スズメより少し大きい小鳥。胸から腹は黄色い羽毛でおおわれる。



マハゼ

河口の汽水域の泥底などに暮らす。食用になり、秋から冬はよく太る。



アブラナ（菜の花）

春先の野原を黄色く彩る。公園や道端でもよく見かける。

花見川のあゆみ

1724（享保 9）	平戸村の染谷源右衛門が、新川の開削と干拓を幕府に出願。しかし工事は難航し、資金不足により中止。
1780（安永 9）	島田村の治郎兵衛と惣深新田の平左衛門が印旛沼の開発計画を幕府に出願。老中田沼意次が取り組むも、利根川の大洪水により工事は中止。
1843（天保 11）	幕府による印旛沼開削の調査が行われる。老中水野忠邦により全国から五藩に普請が命ぜられ工事が行われるが、水野忠邦の失脚により工事は中止。
1946（昭和 21）	農林省によって印旛沼の干拓事業が始まる。
1963（昭和 38）	水資源開発公団（現・水資源機構）によって新川開削工事が始まる。
1967（昭和 42）	大和田排水機場が運転開始
1969（昭和 44）	印旛放水路が完成。250 年の時を経て印旛沼と東京湾がつながる。
1975（昭和 50）	花見川サイクリングコースが完成



千葉市の川	すいすい探検マップ	花見川
2024年8月	初版発行	
発行	千葉市都市局 都市政策課	かわまちづくり班
企画	株式会社オリエンタルコンサルタンツ	
制作・編集	合同会社みちくさ／合同会社青空編集事務所	
印刷・製本	三陽メディア株式会社	

